大陸的おさんどん（承前）

フランク

食堂をすましてのちは、鑿と槌とはわが武器となり余はバケツ片手に倉庫に下りゆき氷室の中に飛びこむのだ、この寒中ではまことにありがたすぎる仕合せ、八寒地獄の標本　活人畫で見せると云ふ格、山の如き氷山あり鑛山夫宜しくと云ふ、勢にて氷片を碎きとり、御丁寧にも一々それを口に入れる位に碎くのだ。どうしても一回に二斗位は必要だ。氷の刃にて傷つけらるゝは幾度あるかしれねどすでに感覺を失ひたるわが手には、何とも答へぬ、片々紅を染めいだすので、オヤこゝにわが手が御出かいナアと云ふわけ、寒熱の地獄に通ふ茶びしやくは、心なければ苦みもなしと氷片を口にして茶禪一味のほゝゑみをもらすこともあるこゝには上に送管すべき麥酒樽の五六冷やし置くのみか、コック用の牡蠣、蝦、蟹などを貯藏して居る。

出來あがりし氷片を酒保にわたし、吾は次の仕事に急ぐのだ。酒保にてはこれをシャンペンの冷掩に用ゐ又はウキスキーのあとの水盃に投ずるのだ。

九時半或は十時頃朝飯をしたゝめるのだ、凡そその日の献立のうち何れにても注文することが出來る肉喰はぬ身にもそれぞれ要求のなきにあらず、わがチャーレーは健在矣、今日はサラダにオムレッ、カドフエシュのボールが出來ますかとは、吾ながらかくも生嗅くなりさがりたるものかな、好笑好笑。

オヤ忘れてゐたと紳士室の電池を檢査しなくてはならぬと、食半ばにして立ちてゆく。日本ならばお煙草盆と云ふべきところ、こゝにはピストル形の火器一ッ折り曲げると電氣にて點火するやうに出來てゐる。その元じめのところにガヤスリンを

充て、電池の裝置もはどよくして再び食卓につく。何たるのろまな給仕人ぞ。今ごろまで芥子やわさびの切り盛りをして、鹽に胡椒よと忙はしげに仕度してゐるのもある。客はそろそろ來て居るでないかそして第一の珍客樣ミストルフランク是にあり、早くしろよ不景氣なと、肩一つ叩きて吾は食卓を立つてゆく。

再び氷室にゆきて大なる氷片を運び來り、給仕人のためにはバターに冷やすため、ランチ係のためにはランチメールを冷やすため酒保のためには氷室の酒瓶のため、一々供給してやらねばならぬ内部の仕事はあらかた終りとなつた。これより戸外に出でゝ磨きものをするのだ。カアヘイと云ふはフランスぶりなる意氣な料理屋のことにて、酒屋とレストランドとを兼帶せるを云ふものださうな、そのサルーンには必ずありと云ふ戸外の眞鍮飾り、こゝにもありがたく存在してゐる酒保の入り口には騎兵の服の飾りのやうに眞鍮の棒二十四本ぞならべられたる、それが裏と表とにあるからいろは四十八本ぢや。ふみ段にも眞鍮あり、看板も例的だ、おまけに女性用の戸には大和鏡のやうなヤツが光つて居らねばならぬ。十一時半まではこれ等と組みうちする。

十一時半よりは庖厨と棚一つへだてたるパントリーに入りて働くのだ。こゝはまだ大暑炎天と云ふ氣候、ケッチンのストーブは醉ふて怒つた關羽のやうに赤くなり、肉をやく烟は濛々して立ちこめ四人のコックはわがチャレーを將として大刀に肉を屠るもの、車を廻して卵をベークするもの粉を揑めてミンスパイをつくるもの、芋をくだきてマッシをつくるもの、一寸のすきまなく働いて居る、十余人給仕人は皿をさゝげて往復し、洛陽の車馬絡繹織るが如しと云ふ態、命ずる聲應ずる聲、活氣を飛びこえて殺氣を帶びてゐるこそ笑止なれ。かなたには同胞二人の皿洗ありて一日十一時間ひたすら皿を洗ふてゐる。ヤア君、今日は馬鹿に多

く來やがるナア、中々忙はしいよ、チト雨でもふると客足が減ずるから閑になるがナアなど勝手なことを云ふてゐる、抑この皿洗はアメリカ苦行の初門と云ふところ仕事は單純で言語は不用と云ふので、渡米最初の人に多くある働口でわが友二人もまだ十七八の少年である。きけば母國を船出してよりまだ三ケ月とか四ケ月とか、吾れは知つたかぶりに通辯となりてコック輩の奇談百出を紹介するも慰籍の一つを與へたいばかりである。

吾はこゝにねて珈琲なつくらねばならぬ。ミルクを沸かさねばならぬ。バターを切りて供給しブレードを切りて送りだすのだ、ブレーの種類三、ホワイトブレードと云ふは普通のもの、グリーレブレードと云ふのは色くろくして、山椒にて香を添へたもの、ポンポニケリーとか云ふのは今一段色黑くして、蕎麥のやうな味するのである。西院の河原のいとし子の、石つみ花つむやうにテーブルにつみならべ、一寸と見ぬうちに給仕人は

恐くもつてゆつて仕舞ふ。中々の繁盛である。食堂の方は一日千人以上は何日でもある土曜日曜は二割增、酒保のみの客は千を下りしことはないとのこと、吾はかの音樂をきゝながら銀器を是處にて洗ふのである。スプーンとナイフとフォークと熱湯の中に投入したるを武内宿禰式にとり出して淨巾にて拭ひそれぞれ仕わけして函に入れる。洗ふ上から投入する、入れる下からもうだすと云ふ早業、唯見る白魚の船べりに去來するに似たるを、その間に棚の上なる皿を乾燥棚の中に入るゝも一役だ。皿は到底拭ひきれぬ故水を切りてギャスにて熱し乾かすのである。

レデイの前にては上品な言葉ずかひに飽きはてゝかこゝに入り來るや否やウエタの惡口雜言きくに堪へぬ。はては戯れの言ひ草に花がさきて本ものゝ喧嘩となるも珍らしくはない。業報人、這畜生の流丸に觸れて吾とても幾度か夜刃の眞似をしたこともある。竹影楷を拂ふて塵動かず、月深潭を

穿ちて水に跡なしなど古人の心要をこの間に味ひたいものと勉めたのである。午後一時にはこのパントリー専門のわが友は來る。A生と云ふので明朝の一時までこゝにて働きづめをやるのだ金無垢の指環をぬきとりて、一寸と裏に堀りし文字を見てくれなど云ふハイカラ男優さ男眞紅のネキタイに流行のピン、黑のパンツの折目たゞしくホワイトコートの眞白き襟に、カーネーションをさして居る。

吾は從住に什物を引つぎて、チャーレーを訪れその氣焔をきゝながらわが書食の出來あがるのをまちて居るフランク、君も早くコックになり玉へ、どうだ僕を見玉へ。一日九時間ばたらきで六弗はエライぢやないか。一週十弗位で滿足してゐる君や給仕人など憐むべきものだネー。サア一杯を買ふてきてくれ玉へ。麥酒の大盃をさしだした一日六弗のその二弗位はこゝにて酒代として仕舞ふのである。わとの殘りも宅まで無事で持ゆくかどうか怪しきもの、レストランドばたらきするものはウエターにせよコックにせよ昨週は北街に今週は南街にと、ところさだめず放蕩してゐるのだ。その魚河岸的氣性のうち面白いところもないではないが金をつくり、金を費す、縞の財布の生人形の外何等の能もないのも憐れな話、ともかくも吾には上等の御料理をくれるうちは厨夫長はよい人の部として置かう呵々。

食後若し雨なくば市街の日よけを下ろし、人道を掃き客の一時退潮となりしを見はからひ食堂を掃くのである。白砂をまきちらし居る上を箒輕く提げて、繪師が藁筆つかふやうにしの字しの字と畫きながら掃くのである。これならばよしや三人五人皿にすがりて殘り居るものあつても塵もたゝず不調法もないではないか。

アゝ今日の仕事ももはやくだり坂となつた。電燈の塵でも拂はんかと、かの女性御用の食堂にゆつて見る。咄々怪事、掲示は僞善の看板にして、レ

デイだちはジンやウヰスキーやを痛飲して居る。ブランデーを傾けて居る巴御前も居る麥酒をとりはじめてから三時間、未だ去らずに居ると云ふ板額刀自も見ゆる。はじめは臙脂の花唇可愛らしく紙管にて呑んでゐるが、紅臉いよゝ色づきそめては矯舌の呂律狂ひ友と酒盃を高くさしわげ、憂として相ふるゝところ、バイカラと蠻カラとの追分峠、これより下りては余り淺ましくて筆にものばしがたいのである、かくても醉を電氣仕かけの扇の風にさまし、化粧室の二十分、虫もころさぬレデーとなりすまし、オペラグラスを高い鼻の先にかざし、纖手重げに裳をうしろにかゝげ、蓮歩ゆるゆる運ばせ玉へば、ゆき合ふ二等人種の男子だち帽を脱しての御挨拶、そはアメリカのありがたいところなるべし。これはしたり讀者の多數は御婦人がたなるものを。妄言多謝、殘れるタイムを埋めんがために、吾はウエターの二三と椅子に坐して、ペーパーナプキンを摺むは

常朝來はじめて腰を下ろしての仕事、ウエターの多くは獨逸人であるから、かゝる時こそと半熟のジャマンを仕用して見る、とかくするうちに五時に二十分ばかりとなる。すこしずるいしかたであるがそのタイムを食事に費してカツキリ五時におさらばをするのだ。

この芝居は、〇六年の十二月六日に蓋をあけ、〇七年二月十一日に千秋樂となつた、すこしく健康を損じたる上に、日曜とてもなく毎日同じことのみくりかへして居ることの余りにも無趣味にて飽きはてたからである、

幾十冊の書を購ひ得た外、さしたる貯蓄も出來なかつたが、家庭勞働に比して氣骨の折れざること無類、皿一枚割りたりとてマダムの二十分の説教をきくなどのことはこゝには昔の夢の如く思はるゝばかりである、二千余個の酒盃、一日に五個六個は誰れとなしに破るもの、その硝子屑を入るゝ箱をそなへて置くなどは面白いではないか。

すべてが自由の空氣にみちて、氣に入らなければ二日にして去るもあり、去りたるものは去るにまかせ相談熟せば誰れにても新たに雇ふ。何等の情實も何等の遠慮會釋もないのである。大陸的など丶大袈裟の戯題であるが、そのノンキなるとろはたしかに島國根性を治療するによかつた。廣間の壁上、次の獨逸文が掲げてある、お客樣だからとて低頭平身するわけでない、云はゞ相互の便利のため働いて居るばかりと云ふ鹽梅。

踵の踏みかたさだかならぬとき。腦の工合變チキリンなとき、分別はビアの泡のやうに高く溢る丶とき、足はつかれてふらふらするとき、聲の響の具合ならで大なるとき、ソラ見ろ、それが醉ぱらつてきたのだ。汝泥醉漢、三千里外に疾走し去れ。疾去、疾去、勿得久住、急々如律令。

かくても三日に一度位は室の片すみにて、酣睡雷の如きことなきにしもあらず、曹孟德猛然として立ち、鐘鬼の小鬼を提ぐるが如くこれを戸外に放ち足げにして仕舞ふはかゝる時である、食卓につくものにして一回壹弗以下の拂をするものはないのであるが、壹弗だして踏まれてかへるは情ないことだとフビンにも思ふ。ともかくも時間の正確なると職責に訴ふる外小言の發信局なきとは余の大いに氣に入つたところであつたどうしてもケチンに腐れ縁あるものかこの頃は一級昇進してコックとしやれこみ、王府を去ること百五十里に舞臺ヅラを晒らして居る。何れそのうち何等かの脚色となつて御ひいきさまがたの喝采を得る時があるであろふ。先づはこれでチョンチョン幕。